

## 昔・今

鳥取県・東レ労組名古屋支部 OB・池原 義人

昭和22年1月24日、滋賀県大津市の東洋レーヨン株式会社（現東レ株式会社）滋賀工場に入社。ペニシリン研究部。17歳。敗戦の混乱の中、学校教育に希望が持てず、とにかく生まれ育った鳥取県から都会へ出たかった。

何の知識もないまま、就職した。

寮生活もめずらしく、不十分な食事もあり気にならず、休日ごとに京都市のおばさんの家に行き、闇で仕入れたご飯を遠慮なくよばれていた。寮生活は、20畳の大部屋に10人はいたか。1人半間の押入れがあり上段に私物、下段はフトン収納。トランク一つで、転出証明書を持って入社した。寮のある会社では寝具一式は会社で用意してくれていた。戦後間もないので、いろいろな人が入寮していた。

復員したが、もとの会社が無くなり、とにかく世の中の情勢を見て、昔勉強した化学を活かせる東京の会社へ行くのだという人、もう一度どうしても船に乗りたいが、乗る船がないため待機している人、また、職場には、満州から引揚げて、まだ髪の毛が伸びていない女の人もいた。

### 労働組合結成時のこと

労働組合のことは何も知らなかった。滋賀工場に労働組合が結成されたのは、昭和21年3月5日。したがって入社時には労働組合員でもあり、いろいろな組合活動が行われていたはずなのに、今、記憶に残っていることは何もない。

当時の記録によると、執行委員長は間宮重一郎氏。

田代茂樹社長から「労働組合結成を祝う」（注1）祝辞を戴いた、とある。。今読んでも感動的なので初めと終わりだけ記す。

「本日、当工場労働組合が結成式を挙げられるに当たり、親しく祝辞を申し述べる機会を与えられたことは、私の最も欣快とし、かつしあわせとするところであります。労働組合の由来するところは、大工業において資本の力に対抗するため、労務者の連帯および共同のあたえる力をもってする必要を痛感した結果であります。

したがって資本を代表すると思惟せられる経営の首脳者が、労働組合の結成に祝意を送るということは、少なくとも欧米の眼よりすれば、はなはだ奇異の感なしとしないところであります。しかしながら現下ならびに将来の日本産業にあつては、決して不思議なことではなく、私は衷心から当組合の誕生を祝福し、かつ日本の労働組合がすべて健康に正しく、かつ強力なる育成を遂げて、日本産業のバックボーンとなり、その再建と発展を推進し、達成せしめられることを念願してやまぬのであります。（中略）

終わりに、諸君の労働組合は、諸君の力によってできたものではなく、諸君の先輩諸氏の長年の死闘によって培われ、はぐくまれ、そして敗戦による外部的衝動によって生まれ出たことをはっきりと認め、謙譲と自省をもって今後の発達に真摯なる努力を傾注せられることを切望いたします。なお、本日は、わが国労働運動のために、その半生以上を捧げられた西尾末廣氏の臨席を得られたことは諸君が光栄とされ、心強く感ぜられるところと察します。私は、一社会人として同氏の過去のご敢闘に対し、深甚なる敬意を表するとともに、今後いっそうのご活躍を衷心より期待するものであります。」

## 当時の生活・一断面

ペニシリン製造は、当時、表面培養で、アメリカから取り寄せたのか、コーラ瓶を横に寝かせて恒温室の中でペニシリン菌の培養をしていた。

次いで表面積が多く取れるよう、アルミ缶で作られた培養器で行った。並行して300立タンクによる浸透培養。日本で最初とか。

入社したときは、工場構内への出入り口は、社員と工員で区別されていたように思う。昭和23年3月1日、身分制度が廃止され、従業員すべてが社員となった。

毎年賃上げされて、生活も楽になったはずであったが、実感はなかった。冬のオーバーを作っても、何ヶ月も出来上がったオーバーを横目で見ながら月賦で払い込み、やっと払い終えて受け取ったときの嬉しかったこと。上司が、時々、給料が入ると背広、シャツ、ネクタイ、靴、靴下、下着まで新調して、京都で一晩遊んでも生活できた…と話していたが、そんな話を聞いても想像できなかった。

昭和28年、肺結核のため、長期入院することになる。入院を知らせると父が来てくれた。父は支那事変で応召したあと、母は年老いた祖父母と三人の子供をかかえて、家業の和紙づくりをしていた。過労のため肺結核となり、父が除隊後、入院、長期療養した。父はその時の経済的負担を知っているだけに、私の入院で困ったことだと思ったという。

幸い、健康保険があり、休職中の生活保障等の制度を知り、安心した。病気しても治療に専念することができる制度に感激した。健康保険制度のおかげで父に負担をかけることもなく、2年間の療養ののち、無事、復職することができた。が、入院中、ペニシリンの生産が中止され、職場が無くなってしまったため、もとの上司が心配してくれて、電気課に決まった。まったくの素人、一から電気の勉強を始めた。

## 組合活動の一断面

結婚、長男の誕生、生活も落ち着いたので、組合運動に参加することになる。始めは大会代議員、その後東レ労連のオルグ講習会にも参加。各支部からの人達との交流もできた。

滋賀支部の機関紙である「労鐘ニュース」の編集委員のとき、昭和36年1月、滋賀支部の芦田恵一執行委員長が、アメリカ労使関係生産性視察団の一員として参加された時の話はショックであった。(注2)

「アメリカでは、職業教育が充実していてレベルも高い。日本ももっと教育に重点をおいた政治が行われなければ、世界の技術革新の進歩に遅れるのではないか。また、日本の繊維産業の労働賃金が低く、そのため、繊維製品をダンピングして輸出しているという、アメリカ国内に批判を直に聞いて、自分たちが苦勞して作った製品を不当に評価されていることに、深い憤りを感じた。」という報告にショックを受けた。

## 喜寿を迎えて思う

今年喜寿を迎える。OB友の会から記念品を戴いた。よくここまで生きてこられたものと感謝している。3年前、脳梗塞を患い、中年からの高血圧治療と、2週間ごとにかかりつけの医院で血圧測定、投薬を続けている。年に1度人間ドック入り…薬で体調をコントロールしている。

年金生活者にも介護保険料、次は所得税がかかるようになった。双子で百歳、有名なキンさん、ギンさんではないが、いくつになっても老後の貯えを考えなければならない。本当に日本は住みよい国なのかと、自問したくなる時もある。確かに1ヶ月の給料で衣服を整え、

余分で生活できる。しかし、職種転換による職業訓練制度、この間の生活保障、病気の時の医療費負担等、個々にみても、60年前にくらべて充実していると言えるのか、懐疑的になってしまう。

### 50年ぶりのUターン

余談になるが、50年ぶりにUターンした故郷は、この春、134年続いた小学校が閉校となった。また、伝統の因州和紙づくりも危機に瀕している。手漉き和紙を漉く簀桁という木組みの道具作りの家が日本でたった一軒しかないことを知った。ここでは皆高齢で、後継者もない。一人前の職人になるためには、10年、20年かかる。後継者がいなくなれば、手漉き和紙は減びることとなる。

注1……田代茂樹「東レとともに」P15 [労働組合結成を祝う] 昭和23年3月5日となっているが、昭和21年の間違い。

「れいえん」創立30周年記念特別号P53 労働組合結成さる

「東レ時報」追悼号田代茂樹名誉会長をしのぶP34 「思い出・労働組合設のころ」間宮重一郎

「労働組合15年史」東洋レーヨン労働組合滋賀支部P12 組合結成大会

これらはすべて結成は昭和21年3月5日となっている。

注2……「労働ニュース」第183号 昭和36年5月11日訪米特集号「アメリカ視察記」執行委員長 芦田恵一